



OVERSEAS

海外事情

Republic of the Union of Myanmar



— ミャンマー連邦共和国 —

「アジア最後のフロンティア」ミャンマーの現状と魅力



樋口 麗 HIGUCHI Urara

八千代エンジニアリング株式会社 / 国際事業本部 / 社会・経済基盤部 / 社会開発課

ミャンマー

ミャンマー連邦共和国は「アジア最後のフロンティア」と称され、近年の順調な経済発展と外国資本の進出ラッシュに沸く東南アジアの国である。本稿では「ミャンマー国貧困削減地方開発事業フェーズ2準備調査」(国際協力機構、2015年度)に携わる中で見聞した内容を踏まえ、ミャンマーの現状や魅力について紹介する。

地理・歴史

ミャンマーは中国・タイ・ラオス・インド・バングラデシュと国境を接しており、気候は主に熱帯モンスーンに分類されている。季節は夏季・雨季・乾季の3つ。雨による交通への

影響が少なく、比較的涼しい乾季(10～2月頃)が、観光のベストシーズンと言われている。

歴史的には、19世紀まで複数の王朝が興隆・衰退していたが、3度の英緬戦争を経て1886年イギリス植民地となり、その後第二次世界大戦後の1948年に「ビルマ連邦」として独立・建国を果たした。1989年に当時の軍事政権が国名を「ミャンマー」に改名するまでは、一貫して「ビルマ」という名称が使用されていた。この軍事政権の正統性を否定する人々の中には、「ミャンマー」という名称を認めていない人もおり、現在でも時々「ビルマ人です」といった自己紹介を受けることがある。

民族

8つの主要民族から構成される多民族国家であり、最多のビルマ族は人口の約7割を占める。ビルマ族は主に国土の中央部に置かれる7つの管区(Region)に、その他の少数民族は主に国土周辺部に位置する7つの州(State)に居住している。現地調査スタッフの中にも、「カチン族」や「カレン族とビルマ族のハーフ」の人がいた。顔や体型といった外見的特徴から民族の区別を言

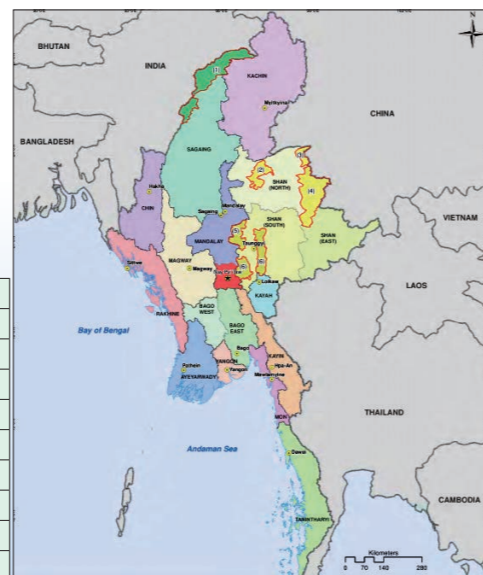


図1 ミャンマー地図

表1 ミャンマーの基本情報

面積	68万km ² (日本の約1.8倍)
人口	5,141万人 (2014年9月)
首都	ネピドー
民族	ビルマ族 (約70%)、その他多くの少数民族
言語	ミャンマー語
宗教	仏教 (約90%)、キリスト教、回教等
国祭日	1月4日独立記念日
政治体制	大統領制、共和制
元首	ティン・チョウ大統領 (2016年3月就任・任期5年)
国会	二院制 (上院:民族代表院、下院:国民代表院)

(出典:外務省HP)

い当てるのは、最多のビルマ族の人々にとっても難しい場合が多いらしく、「名前」「服装」「ミャンマー語の訛り」などから初めて気づくこともあるようだ。

なお、民族や文化の多様性は間違いなくミャンマーの魅力の一つだが、民族間の対立構造は独立以降の恒常的な課題でもある。段階的な停戦合意が結ばれているものの、少数武装勢力とビルマ民族(国軍)の衝突・緊張関係は現在でも存在している。

言語

ミャンマーでは公用語のミャンマー語の他、民族特有の言語が使用されている。民族間の言語の違いは「方言によるバラエティー」と捉えられるようなものではない。民族特有の言語とミャンマー語を両方話せる人はバイリンガルなのである。

また、英語は街中であまり通じない。ミャンマー語の表記はアルファベットではないため、外国人が飲食店などで言葉が通じず困った時に、「表記通り発音してみる」とか「スマホに打ち込んで自動翻訳する」といった常套手段が取れない。一方で、外国人と接する職業に就く一部の人々は英語が得意であり、日本語や中国語などのアジアの言葉に長けているミャンマー人も各業界で活躍している。外国語の能力に関しては二極化している感じだ。

選挙と政治

2015年11月、アウンサンスーチー女史(現・国家顧問)率いる国民民主連盟が総選挙で勝利し、翌年より政権運営を行っている。私たちの現地調査は、この総選挙や政権移行時期とちょうど被っていたため、安全面での混雑が懸念されていた。

選挙期間中の安全対策として、地方山岳地帯や国境付近、とりわけ少数武装勢力の活動地域へ実踏が制限された。これによって調査対象地やルートの変更等を行う必要が生じた。なお、選挙の時期以外にも、通常このような地域に外国人が立入るには、いわゆる通行許可証(Travel Permit)を数週間前から申請し携帯しなければならない。場合によっては、それに加えて現地政府関係者に付き添ってもらう必要がある。

首都ネピドーや国内最大の都市ヤンゴンなどの都市部においては、選挙時期も調査活動が続けられたが、外国人がトラブルに巻き込まれる大きな事件はなかったようだ。確かに、選挙演説や政治集会は何度か見かけたものの、街全体としては普段と変わらない平穏な様子であった。その様子は英国BBCの記事でも取り上げられており、2015年末の「今年最も平和かつ民主的に



図2 ミャンマー語の表記(子音一覧)



写真1 シュエダゴン・パゴダ寺院の煌びやかな仏塔



写真2 パゴダで祈る敬虔な人々たち。中央にLEDライトが設置されている。歴史ある宗教的建造物でも、できる限り新しいものにアップデートするといった考え方があ



写真3 ネピドー郊外の市場の女性。長い巻きスカートは伝統衣装「ロンジー」。普段着にも、正装としても着用される
写真4 ホテルで食べたシャン麺

選挙を行った新興国ランキングで、ミャンマーを第1位にあげている。

治安

ミャンマーの治安について特筆すべきは、お金に関するトラブルの少なさである。外国人をターゲットとしたスリやぼったくりは、インドやタイなど近隣国ではよくあると聞かすが、ミャンマーでは滅多にない。民主化や経済開放から比較的日子が浅く、「外国人からぼったくる」「会計をちょろまかす」意識自体がミャンマーでは未だ醸成されてないからだと思測している。

国民性・人々

ミャンマー人は、年齢・地位が同等の友人や同僚に対しては親しみやすくオープンであり、上司・年長者に対しては忠誠心が強く従順（これを軍事政権時代の名残だとの見解もある）といった印象がある。カウンターパートのミャンマー人と仕事をしていく上で実感したことは、この「上司・年長者に対して忠誠心が強く従順である」という国民性には、一長一短があるということだ。

良い点は「トップダウンの指示がある場合、先方の意思決定が迅速

かつスムーズである」こと、「アシスタントとして雇用すると、一生懸命指示に従う上にサービス精神を発揮してくれる」ことと言える。その反面「『上長の一声』により協議済みの決定事項が揺るがされる」ことや、「上からの指示・承認待ちのために、予想以上の時間や手間を要する」こともある。

速やかに済ませてしまいたい連絡や調整事項に対しても、「自分では判断し兼ねるので上の者に聞いて下さい」とのことで、結果的にかなりエライ人とFAX文書を取り交わすことになったことがある。慎重で忠実なミャンマー人の性格を表す出来



写真5 道端で出会った牛。牛は農耕に使われる。牛乳は生産されるが、牛肉はポピュラーではない

事だと思ふ。

食文化

ミャンマー料理で代表的なものといえば、ナマズの出汁と米粉を使った麺料理であるモヒンガーやカレーなどがある。ビルマ文化以外の起源を持つ料理では、ミャンマー東北部にあるシャン州のシャン麺が有名だ。タイ料理や四川料理ほど辛くなく、インド料理のように香りの強いスパイスを多用していないミャンマー料理は、私も含め大抵の日本人の口に合う。ただ、全体的に油っぽく、カレーの表面に5mmほど油が浮いていたりするので、食べ過ぎには要注意である。

地元住民が集う飲食店では、一人700～800円で夕食をお腹いっぱい食べられるリーズナブルさも嬉しい。ビールも一杯150円程度である。

都市部の外食産業においては国際化も顕著で、中華料理やタイ料理が最も浸透しているが、日本食や韓国料理の進出も目に付く。一方、ヤンゴンでさえもイタリアン等の西洋料理は家庭料理としても滅多に出ないほど珍しく、米国資本チェーンの代表格である某ファストフード店やカフェ店がほぼ見受けられない。



写真6 世界三大仏教遺跡の一つ「バガン遺跡」

写真7 ネピドーにある国会議事堂の入口

「国際化していながらアジア色が濃厚」なのがミャンマー食文化の特徴ではないだろうか。

電力・給水事情

ミャンマーの電化率は都市部で約8割、農村部で約3割と未だ低水準にあり、電化地域においても停電が頻繁に発生する。このような状況と近年急増する電力需要を背景に、政府も電力供給を優先度・緊急性の高い政策課題として位置付けている。2030年までに国内全世帯の電化を目指す「全国電化計画（NEP）」が掲げられ、太陽光や小水力など再生可能エネルギーも含めた幅広い分野における技術協力が始動している。

給水状況もまだ発展途上である。安全な水へのアクセス率は7割。多くの農村では水道が整備されておらず、徒歩やオートバイで川へ水汲みに行くことが家事労働の日課となっている。ミャンマーの給水分野における課題としては都市と村落で給水を管轄する組織が異なり、前者が地方自治体に属する委員会であり後者が中央省庁の地方出先機関であるため、全国的に統一された効率的な管理・運営体制が存在しないことや、高いスキルを持つ水道技術者の不足などが認識されている。

道路

鉄道が発達していないため、インド・タイ・中国といった巨大市場と陸続きで隣接しているミャンマーでは、道路整備の重要性が極めて高い。現在、幹線道路のみの舗装率でも約7割にとどまり、陸路でしかアクセスできない地方都市へ続く道路さえも未整備なところが多い。そして、未整備の道路は雨季に不通となる。

今後の地方道路整備により、物流網の改善、延いては農業生産の拡大や観光業の発展などが期待されている。高まるニーズを受け国際機関や各国ドナー、特に東アジア各国が積極的な援助を始めており、「誰がどこの道路区間を援助するのか」といったドナー間調整も欠かされてなくなっている。

交通

都市交通については、ヤンゴンとネピドーで様子が大きく異なる。ヤンゴンの交通の特徴といえば、凄まじい渋滞である。目的地までに要する時間の予想がつかないので、早めの行動を心がける必要がある。ヤンゴンを走る商用車は、日本で使われていたままの車ばかりで、「有限会社〇〇」と書かれたトラックや「〇〇中央交通」と書かれたバスがひしめき合っている。また、大渋滞の中を

徒歩ですり抜けながら、女性や子どもが水・地図・お土産などを販売しており、沿道にはランダムに並んだ屋台と悠長に歩く野良犬がいる。

対照的に、2006年にヤンゴンから遷都して新首都となったネピドーには渋滞がない。移動には快適だが、広すぎる道路幅と少ない交通量のアンマッチ具合が不思議な光景を作り出している。ちなみに、国会議事堂の前はなんと片側10車線もある。これは、有事の際に飛行機が離着陸できるようにとの軍事的な意図のもとに建設されたものらしい。山を切り開いて建設した「人工首都ネピドー」の象徴である。

今後は

「アジア最後のフロンティア」として称され、その経済ポテンシャルが目玉されるミャンマー。しかし、観光資源・文化・人々など、経済指標とは別の視点から垣間見える姿に、今なお好奇心を駆り立てられている。ミャンマーの持続的な経済成長や社会的発展を願うと同時に、現地を実際に訪れ、そのダイナミズムを肌で感じる日本人が今後増加すればいいと思っている。

<図・写真提供>
図1 ミャンマー情報管理ユニット (MIMU)
図2 Omniglot